

| | |
|---------------|---|
| Title | 国語問答 ホアン・デ・バルデス(翻訳-2) |
| Author(s) | Valdés, Juan de; 中岡, 省治 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 35 p.43-p.61 |
| Issue Date | 1976-03-01 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80570 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

国 語 問 答

ホアン・デ・バルデス (翻訳-2)

中 岡 省 治

Juan de Valdés : Diálogo de la lengua

(国 語 問 答)

Shoji NAKAOKA

A continuación aparece una traducción parcial del *Diálogo de la lengua* compilado por Juan de Valdés en 1535 en Nápoles y publicado por el egregio lingüista Mayans y Siscar por primera vez en España en el año 1777.

Parte de la obra también traducida que precede a la presente fue publicada en el Journal of Osaka University of Foreign Studies edición año 1972.

学報第30号(昭和49年11月発行)にホアン・デ・バルデス著、「国語問答」の一部訳出を試みたが以下はそれの引続きである。

16世紀はルネッサンスの洗礼を受けたヨーロッパ諸国に各国語擁護論が盛んに輩出した時代であった。Pietro Bembo の *Prose della volgar lingua* (1525), Du-Bellay の *Défence et illustration de la langue française* (1549) の二著に並んで, Juan de Valdés の *Diálogo de la lengua* (1535) がイスパニア語史の上でも重要な位置を占めているが, この文献は当時イスパニア領であったナポリで編纂されたこと, また作者自身の社会的立場などの理由から編纂後直ぐには上梓されなかった。この作品の存在は当時の有識者の間には知られていたのであろうが, 公けに刊行されたのは18世紀末, 言語学者, Gregorio Mayans y Siscar がその著書 *Orígenes de la lengua española* の第二巻に作者不詳として, “*Diálogo de las lenguas*” との標題のもとに発表したのがイスパニアにおける初版本となっている。

なお, この翻訳にあたっては, Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José F. Montesinos, *Clásicos Castellanos*. No. 86 をテキストに用いた。またこの問答に参加する四人, 即ち Valdés, Marcio, Pacheco, Coriolano は訳文中では夫々の頭文字で表示している。

M. カスティーリャ語の起源については、私たちにお話し下さったことを心得ておくことで十分すぎる程です。ですから次は、文法に関する点で、カスティーリャ語が自らを飾り、その身を整えるための語彙を提供した他の言語とカスティーリャ語とがどのような一致点を持つかをお伺いしたいのですが...

V. 文法の規則の話に私をひきずり込みたいということなら、長い、面倒なことになりますよ。しかし、あなた方の言に従わないと言われるのもいやなので、今さし当り思いついたことをお話ししましょう。

M. ええ、私たちはそれで結構ですよ。

V. 言語相互間の一致という点では、カスティーリャ語はギリシャ語とこの面、即ち、ギリシャ語と同様、冠詞を持つという点で一致しています。

P. 何を冠詞と呼ばれるのですか。

V. El, la, lo, los と las のことです。

P. 成程、わかりました。

M. すると、どんな風にこの冠詞を使うのでしょうか。

V. El は男性名詞と共に、el hombre のように使い、la は女性名詞と共に、la muger のように用い、lo は、lo bueno のように中性名詞と併せて使いますが、これは単数形しかなく、他の二つのように複数形はありません。ところで、複数形には男性形として、los hombres のように los が、女性形には las mugeres のように las が使われます。

C. ところで他の格についても冠詞があるのですか。

V. 男性属格には del hombre のように del が、女性属格には de la muger のように de la があります。ただ、男性名詞であれ、女性名詞であれ、冠詞に de をつけ加えたらいいのですが、男性形では e を落し、de el hombre とせずに del hombre と言っていると思いますよ。

P. 間違いありません。そうだと思います。

V. 他でもないこれらの冠詞は奪格にもなります。というのも、《Del lobo un pelo y esse de la frente》⁽¹⁾ というときの del lobo は奪格になっているからです。同じ方法をとって、与格、対格には主格の冠詞に a を加えますが、男性形では e を落して、《Dixo el asno al mulo: harre allá, orejudo.》⁽²⁾ のようにしますが、ここの al は a el を表わすのです。女性形では脱落するものはありません、というのは《Dixo la sartén a la caldera: tira allá, culnegra.》⁽³⁾ といっているからです。中性冠詞についても女性冠詞とまったく同じ方法をとっています、これも、主格の冠詞に de をつけ加えて属格、奪格の冠詞をつくり、a をつけて与格、対格をつくるからで、de lo は属格、奪格として、a lo は与格、対格として、例えば、《De lo contado come el lobo.》⁽⁴⁾ などのように使うからです。しかも、男性形では el, del, al、女性形では la, de la, a la と単数があるのと同じく、複数では、男性形に los, de los, a los を、女性形に las, de las, a las を使っています。中性形には、すでにお話しましたが、複数形はありません。⁽⁵⁾

M. 冠詞が一致するという点でのお話、それで十分ですので、どうぞ話を先にお進め下さい。

V. 格の変化のないという点では、カスティーリャ語はヘブライ語と一致しています。という

のは、単数形では、すべての格はただひとつの語尾しかなく、複数形ではこれまた別のひとつの語尾だけで、例えば、bueno, buenos; hombre, hombres としているからなのです。このヘブライ語と今ひとつ一致する点は、カスティーリャ語の多くの単語がそのアクセントを最終の音節におくこと、また、複数形の意味をもたせて、時どき単数形を用いることで、これは muchas naranjas, passas o higos に代えて、much a naranja, passa o higo などという場合に表われています。また、dadle や tomará se のように、代名詞を動詞にくっつける点でも共通性がある、具体的には、《Al ruín dadle un palmo, y tomará se quatro.》⁽⁶⁾ という諺に出てくるのです。ラテン語とは主としてある種の表現の方法の面で、またすでに皆さんも聞いてくれたことですが、ギリシャ語との間にも、ラテン語とは別の表現の仕方の点でカスティーリャ語は共通点があります。また、ラテン語とはアルファベットを同じくしますが、この二つの言語は次の点で、つまり、カスティーリャ語には gi の音の価値を持つ“長い i”があること、またセリィーリャと呼ばれ c に z の働きをさせる字母があること、これに加えて、多くの地方で n の上に付してそれを g と同じような音にする波形符号があること、この三点で差があるのです⁽⁷⁾。

P. すると、お話しから推して、カスティーリャ語のアルファベットはラテン語のものに比べて三字母多いと言っている訳ですね。

C. こんなことにも出しゃばって目立とうというのですか、パチェーコさん。まあ、好きなようになさって下さい。

V. 文法については、私が旨として守ることになっている三つの全般的な規則をお話しすれば、皆さんに対する私の義務を果たしたことになるかと思えます。この規則というのは、私の思うところ、上手にまた正しくカスティーリャ語を話し、かつまた書くのを会得するためにはかなり重要なことなのです。

P. いや、私としては御免こうむりたいところですね。その規則とやらを全然お話ししなくとも、あなたは十分にその任を果たされたことになりましょうから。

M. 何故そんなことが言えるのですか。

P. 何故って、私はこれまで、こういう文法論議がどうも好きになれないもんでね。

M. たとえそうであるにせよ、あるひとつのことがわかるようになれば、それでもって益々そのことの面白さがわかってくるというのは疑う余地のないことです。あなたがややこしい文法論議が好きではないのは、本当に文法のことを知らないからで、もしあなたが少しなりともそれを知っているとしたら、もっと知りたいもんだと思うことでしょうし、ひよっとしたら、その文法論議を大好きになるかもわかりませんよ。

P. そうなっているかもしれませんが、あなたの言に反論はしませんよ。さて、バルデスさま、あなたのその三つの規則をお聞かせ下さい。多分、それをお聞かせ下さったら、私も文法の値打がわかるでしょうから。

V. 私のいう最初の規則とは、あなた方が話したりあるいは書いたりする単語がアラビア語か、ラテン語かを十分注意して見きわめるべきだということです。というのは、この点がはっきりすれば、その単語を如何に発音すべきか、あるいは書くべきかということをも直ぐにさぐり当

てられるからなのですよ。

M. いいお話しですね。でも、おっしゃることは文法というよりは正書法と発音の分野の問題ですね。

V. その通りです。私は思い付くことをお話ししているのですから、あなた方がいいと思う個所にそれを当てはめて下さい。

M. なる程、そう致しましょう。ですが、何か規則をお示し下さらないと困りますね、つまりカスティーリャ語の諸単語間にそういった区別をつけるそのこつを私たちに教えてくれるような規則を知りたいですね。

V. そうは言われても、私としては、莫然としたことをひとつしか言えないと思いますよ。ずばりそのものというよりは手さぐり程度の役にしか立たないものですよ。

M. それで結構だと思います。お話し下さいよ。

V. まずその最初の点については、ラテン語の単語とも、またギリシャ語の単語とも何の共通性も持たないと見てとれるような単語はみな、たいていはアラビア語であると見当を付けて下さい。こういう単語には大ていは *h*, *x* あるいは *z* がありますが、この三つの字母はアラビア語につきものなのですからね。ですから、ラテン語では *f* を保持していた単語がカスティーリャ語になったとき、その *f* が *h* に変ったこと、例えば、*fava* から *hava* というようになったことは、このアラビア語の *h* に原因があるのです⁽⁸⁾。加うるに、まったく同じ理由で、カスティーリャの多くの地域ではラテン語の *s* を *x* に変化させ、*sastre* に代え *xastre* と言うこともあるのです。⁽⁹⁾ 同じく、普通よく見かけること、つまりラテン語の *c* を *z* に変化させる現象もこれによく似たことで、ここから、“*faciunt*” から “*hazen*” が生れた訳です。これらはいずれもアラビア語から出た発音ですが、カスティーリャ語の中に広くとり入れられているので、“*sastre*” やこれに似た他の単語以外では、ラテン語の発音よりもアラビア語の発音の方がよしとされている程です。こんなことをくどくど申したのは、もしあなた方が上の三つの文字のうちのいずれかを含む単語を見られても、お話しした文字の変化があるかないかを調べて確認するまでは、その単語がアラビア語だと軽々しく考えてしまわないようにというためからでもあるのです。その他の場合としては、“*al*” で始まる単語はほとんど常にアラビア語と思って下さって結構で、ここには、*almohada*, *alhombra*, *almohaça*, *alhareme* などが当たります。また “*az*” で始まる語も同じで、*azaguán*, *azar*, *azagaya* など、“*col*” で始まるもの、例えば、*colcha*, *colgajo*, *cohecho* など、“*ça*” で始まるもの、例えば、*çaherir*, *çaquiçamí*, *çafio* など、“*ha*” で始まる *haxa*, *haragán*, *harón* など、“*cha*”, “*chi*”, “*cho*”, “*chu*” で始まる *chapín*, *chinela*, *choça*, *chueca* など、また “*en*” で始まる *enhelgado*, *enhaziado*, *endechas* などアラビア語となります。*Guadalherza*, *Guadalquivir*, *Guadarrama* のように “*gua*” で始まっているものも同じで、これはたいていは河川名や地名ですし、加えて、“*xa*”, “*xe*” で始まる *xáquima*, *xerga* のような語もアラビア語になります⁽¹⁰⁾。原形をそっくり留めたラテン語の語彙については規則めいたものをお話しすることはありません。というのは規則なんて言わずともあなた方はラテン語の語彙はよく知っているでしょうし、少しの注意を払い、努力さえしたらくずれた語彙でもそれがラテン

語に由来するものと分かるはずなのですからね。ただし気を付けてもらいたいのは、アラビア語の語彙の場合にモーロ人がよくする喉でのあの発音はカスティーリャ語にとってはよくないのと同じく、ラテン語の語彙についても、あなた方イタリア人がそれらの語を発音するときにするあのような変った発音の仕方は適当でないということです。こんなことを言うのも、あなた方のうち一部の人たちがカスティーリャ語を話す際、間違ってx⁽¹³⁾を発音しそれでいいと思い込んでいるからなのです。

M. あなたの言われるのはしごくもっともで、今お話しのご注意はまったく当を得たものと考えられると私は言いたいですね。なぜなら、私たちはギリシャ語やヘブライ語から取り入れた語彙をラテン語では、今ギリシャ人やヘブライ人が発音しているのと同じの効果と同一の響きの強さをもたせて発音しているとはいえないですものね。

V. 第二の規則はそれぞれの単語に、それに一致する冠詞を付けることを覚えること、つまり、男性名詞と中性名詞にはそれぞれ男性、中性冠詞をつけて、《El abad de donde canta, de allí yanta.》⁽¹²⁾ や 《Al ruín quando lo mientan, luego viene.》⁽¹³⁾ とし、女性名詞には女性の冠詞をつけ、《La mujer y la gallina por andar se pierde aina.》⁽¹⁴⁾、《El polvo de la oveja alcohol para el lobo.》⁽¹⁵⁾ とすることで、これで男性名詞に女性冠詞をつけたり、女性名詞に男性冠詞をひっつけたりすることもなくなるというわけです。

M. 何をもとにして私たちは単語のうち、これが男性名詞、あれが女性名詞だと見分けたいのでしょうか。

V. その規則をあなたにお話しするのは私にはできませんね、これまで私どもがよく考えてみたことではないからなのです。しかしほんとうのところ、私には次のことが分かっています。つまり、たいていはラテン語の語彙はカスティーリャ語でもラテン語のときと同一の性を留めていることで、ここで“たいていは”と言うのも、一方にラテン語そのままの性を留めていない語も数多くあるからです。例えば、樹木の名称はラテン語では、皆さんもご承知のように、ほとんど全部が女性なのにカスティーリャ語ではおおむね男性となっているし、果実の名称は大部分が女性なのです。しかし、普通一般にカスティーリャ語では名詞はラテン語での性をそのまま留めていて、これがためaで終る名詞は女性となる訳ですし、以下ラテン語と同じ性となるのです。

M. しかし、女性名詞全部になぜ冠詞としてlaを付けられないのですか。

V. いやいや、女性名詞にはみなlaを付けていますよ、ただし arca, ama, ala のようにaで始まるのは別にしてね。この場合にはelを使って el arca, el ama, el ala というのです。これは二つのaが重なってひき起す耳障りな音声を避けるがためのことで、実際、《El mal del milano, el ala quebrada y el papo sano.》⁽¹⁶⁾ とするのが、《...la ala...》⁽¹⁷⁾ というよりもずっといいようです。

M. 男性冠詞を女性名詞に付けるとかいう不都合にも思えることをやるくらいなら、それに代えて冠詞のaを落し、l' arca, l' alma, l' ala という方がいいのじゃありませんか。

V. そうする慣習があればそれは私に間違ったこととは思えないでしょうが、しかしそうは使っていないのですから、私なら無理をしてまでそう言ったり、書いたりはいらないでしょうね。

M. しかしそうは言われても、そんな書き方をしているのを見られたとしたら、それはあなたには間違いとは思われないのでしょうかね⁽¹⁸⁾。

V. 勿論のことです、間違いだとは言いませんよ。さて、ここまでのことはラテン語かその一部がラテン語からきている単語についての話です。その他の単語に関してはとうてい規則めいたものをお話しすることはできませんね。主格の冠詞を正しく用いるという点に払うべき注意と同じことを、属格と対格の冠詞を付けるときにも覚えておいてもらうのが大切で、《Del monte salle quien el monte quema.》⁽¹⁹⁾、《Del lobo un pelo y éste de la frente.》⁽²⁰⁾、《Lo que da el nieto al agüelo.》⁽²¹⁾、《Allegadora de la ceniza y derramadora de la harina.》⁽²²⁾ というもうよう十分に気を配っていないといけませんね。

C. カスティーリャ語の諺、いや諺とか呼んでおられるものを実にうまく使って説明されているように私には思えますね。

V. おっしゃる通り私は諺を引き合いに出してきましたが、これは私の言わんとすることを別にひとつ例を挙げて説明しなければならぬときには、こういう諺を使ってその説明をするのが他の方法を採用するよりも有益ではないかと思えるからで、諺をこうして言うことで皆さん方に覚えてもらえるし、まだそのうえ、よしんば私が作り出せるものがあったとしても、そんな例文よりも昔から伝えられてきた諺の例の方がずっと権威があるとも思えるからです。

C. 結構なお話しですね。しかし、今まで出たもののほとんどが何を言っているのか、私には分からないのですが。

V. 私が何のためにそれを言っているのか、その目的さえ分かってももらえれば十分ですよ。意味内容はいずれ分かってももらえるでしょうからね。

C. そのお言葉をそのままお受けいたします。さて、ところでそういう冠詞の規則を守るのがとても大切なこととあなたは考えかどうかお聞かせ下さいませんか。

V. 実に大切なことだと言わねばなりませんね。例えば、カスティーリャではさしてラテン語を知らずとも、驚くほどにまで正しく冠詞を用いることのできる外国人がいるかと思えば、四十年、五十年とカスティーリャに住み、カスティーリャ語について実によく知っていながら、この冠詞の用法ではしばしば誤りを犯すビスカーヤ人も沢山いることも、カスティーリャでははっきり調べのついていることなのです。ですから、この点には十分気を付けられるよう忠告しておきます。

M. あなたのお言葉に従い、言われたようにいたしましょう。

V. いやいや、あなた方の都合のいいようにすればいいですよ、私には痛くも痒くもないことですからね。それよりも私としては今日のこの仕事を済ませてしまうことの方が大切なので、第三の規則に移りますよ。この規則というのは、単語の発音に際してはあなた方がどの音節にアクセントを置くのかを十分に注意してみる必要があるということで、《Dure lo que durare, como cuchara de pan.》⁽²³⁾ という諺でもわかるようにアクセントが単語の意味を変えることがしばしばあるからです。つまり、この諺であなた方が *dure* と *durare* の最後の音節にアクセントを置いたとしたら、これでは何の意味もなさなくなるでしょう。というのは、そのアクセントでひと

つは過去に、もうひとつは未来にになってしまうからなのです。ですが、あなた方が *dure* の *u* にアクセントを置き、*durare* では *a* にアクセントを置いたら、これで文意が正確に表わされることになります。またもし《*Quien haze un cesto, hará ciento.*》⁽²⁴⁾ という場合、*haze* の後の音節にアクセントを置けば命令形となってしまう、文意を損なうことになりますし、これとは逆に、《*Quien sufrió, calló y vido lo que quiso.*》⁽²⁵⁾ で、もしあなた方が *callo* の *a* にアクセントを置いてこの形を現在としたら、まったく意味がとれなくなるのです。これと同じことが《*Quien con su mayor burló, primero riyó y después lloró.*》⁽²⁶⁾ という場合の *burlo* と *lloro* のように多くの他の動詞にも当てはまります。このような訳ですから、私が何かを注意して書こうとするときには、最終の音節にアクセントを持つ語全部に短線でそのアクセントの場所を示すことにしています。こうすることをあまりにも行き過ぎた、上べだけの銜学趣味にとる人もいることは重々分かってはいますが、私自身それが正しいと、そうするのが必要だと考えておりますので、人がなと言おうと構わないのです。

M. そういうお考えがもとで、お話しのようにアクセントを表示しようとされる訳なのですか。

V. ええ、まさしくそうなのです。

M. このアクセントの問題は、私があなたに対し議論をふっかけようと手ぐすね引いていた大切な問題のひとつであったことをあなたに申しあげておかねばなりません。しかしこの点についてのお考えがすこぶる結構だと私には思えますので、今までは余計なことだと思っていたアクセントを付すという手段を私も使わせていただかざるを得ませんね。

V. このアクセントを付すということについて皆さんからの質問が出るまえに私の話をお気に入ってもらえたとは私も嬉しいですよ。

M. だれもみなが物を書くときにはこのアクセントの符号を付けるようにしたらいいとお考えですか。

V. ええ、できればそうしたらいいと思いますよ。少なくとも、重要なことを内容とする書物を書く人たちやカステーリャの生れでない人に私信を書こうとする人たちはその符号を付けてほしいものです。こういうのもとくに、大した苦勞もなく、手紙の文をどんなに読んだらいいのかをその受け取る人に教えることになりましょうからね。

M. このアクセントの符号を付けるため何らかの確固とした規則をお持ちですか。

V. どんな場合にも真だといえるような規則は知りません。しかし、最後の母音にアクセントを持つ動詞はそのほとんどが、三人称で、*amó* のように過去かあるいは *enseñará* のように未来かのいずれかといっていいいでしょう。

M. このアクセントに関することで他に何か規則にお気づきになっていますか。

V. いいえ他には何也没有什么。というのはご承知のように、平俗語は規則を介して覚えることができるほどにはなかなか規則といったものに収めてしまえないからです。加えて、カステーリャ語は他の平俗語とひどく混じり合っていますので、それを何らかの規則にまとめてしまうことのできる人が果しているかどうかをあなた方考えてみて下されば如何でしょうか。さて、

あなた方の質問は文法についてであったし、また代名詞を名詞に合わせることを知るのも文法にかかわる問題ですので、まずあなた方に、カスティーリャ語はいつも名詞の前に代名詞を置くものだということを知ってもらいたいのです。但し、名詞が呼格にあるときは別で、この場合には代名詞は名詞のあとにきます。ですから、正しい話し方では *mi señor, mi señora; mi padre, mi madre* と言わねばなりません、もしこれらの名詞が呼格に立てば、*señor mío, señora mía; padre mío, madre mía* と言わねばならないのです。加えて皆さんに覚えておいてもらいたいの、もしこれらの名詞が呼格であって、名詞のまえに代名詞を置いたとしたら、丁寧さはうしろにおくときよりもはるかに希薄になってしまいますので、この点からも一婦人に宛てて *señora mía* とするか *mi señora* とするかでとっても大きな差が生じることになるのです。というのも、あなた方が話したり書いたりすることば本来の形式からわざと離れた言い方をすれば即座に、あなた方の話し相手とか手紙の受取人を見下して取扱っているということになるのですからね。

M. あなたはその規則が常に真なりとお考えになっていますか。

V. 私はそう考えたいですね。ただ私が思い付かないような何らかの *ecepción* (例外) もあるかも知れませんね⁽²⁷⁾。

P. ああ、また変ったことを言われましたね、*ecepción* だなんて、私には何のことか分かりませんので、それは純粹のカスティーリャ語ではないということです。

V. なるほどそうですね。だが、この問題についてあなた方が私に話をさせているのだし、また他のカスティーリャ人たちがどんな風な表現をしているかをも私は見たことがないことでもあります、私としてはあなた方の理解できない語の意味をも解明しなければならぬ責任もあることです、そのために一番適当と私には思える語をいくつか使うことがあっても、それは皆さんには辛抱してもらわねばなりません。さて、“ある規則に *ecepción* がある” ということは “その規則で決っている順序から外れるものがいくつかある” ということだと申しておきましょう。

P. なるほどわかりました。ところで、私はあなたがそういう単語を使われるのを喜んで我慢いたしますよ、ただしあなたのいわれるその条件付きということですが…

V. 代名詞を動詞に接合させるのを覚えるのもまた文法の領域で、この点で私はひとつの変った使い方を見かけますが、これが一体どこから生じたのかわかりません。つまり、*ponedlo, embiadlo* を使うべきなのに *ponedlo* とか *embialdo* を使う人が多いのですが、*poned, embiad* は動詞で、*lo* は代名詞なのですからね。なぜこんな形に両方を混ぜ合わせるのかその理由がわかりません。私は、好きなことはなんなりと言えても、間違いだときめつけたり咎めだてたりする気持はありませんが、ただ動詞は動詞で、代名詞は代名詞で夫々その形を留めているのが一番いいと 생각합니다。したがって、《*Al moço malo, ponedle la mesa y embiadlo al mandado.*》⁽²⁸⁾ と言います。同じ理屈が *ayudaráte* に代えての *ayudarte a* にも当てはまりますので、私はいつも、《*Ayúdate y ayudaráte Dios.*》⁽²⁹⁾ と言うことにしています。*Sacarte a* か *sacaráte* でも同じことなので、《*Cría cuervo y sacaráte el ojo.*》⁽³⁰⁾ となる訳です。

P. あなたのこれまでのお話で私には少しばかり文法が面白くなってきましたし、またなか

なかいものだとも思ってきたと私が申したらあなたは私に何とおっしゃいますでしょうか。

V. 私がどう言うかですって。私の生れ故郷で老婆たちの言っていること、つまり «un correverás y otro que te hallarás.»⁽³¹⁾とっておいて、あとはあなたにとっていいか、悪いかは私の考えていることから判断してもらえば結構ですよ。

P. 私に相応しいお返事をいただきましたね。さて、お話しをお続け下さい。

V. こちらは話しを続けるしかありませんが、私があなた方にこれまで十分な文法談議をしなかったといって不満に思ってもらっては困りますよ。

M. 不満なんて申しませんよ、これまでのお話しに 不平なんて言うもんですか。それどころか、私たちにもうこれ以上文法談議をしないと云われるのなら、これは大いに不満に思いますがね。

V. まあ得心のいだけ不平をならべて下さいよ、私にはあなた方に言うべきことしか頭に浮んでこないのですからね。

M. お言葉から察しますと、かの不滅の思い出を残されたイサベル女王殿下の侍従の貴婦人たちのためあなたのお国の人、アントニオ・デ・リブリーシャが書いたとかいわれている「カスティーリャ語文法要提」⁽³²⁾をあなたはお読みにならなかったようですね。

V. あなたの言うとおりです、読んではおりませんよ。

M. なぜですか。

V. なぜというに、私はその文法書が必要だと感じたこともなかったし、またそれが称められたのを聞いたこともなかったからですよ。この点からも、その文法書が世間にどのように受け取られたか、またどれほどに有用なものであったかをあなた方にわかってもらえるでしょう。それは、私の知る限りでは、たった一回しか印刷されなかったのですよ。

P. そんなことはどうでもいいことですし、文法に関してはこれまでのお話しで十分だと思います。さてこれからは、単語について、いくつかの字母を付け加えることにする点をバルデスさまにお尋ねした方がいいでしょう。

V. マルシオさん、何で笑っているのですかな。

M. いやいや、こんなつまらぬ子供じみたことについて、私たちがあなたのお気持ちに反し、無理強いしてまであなたにお話していただいているのを知ってこちらも可笑しく、あなたがそれを辛抱して話されているそのお気持ちを考えてみると嬉しくもなるのですよ。

V. まあそうしているのもいいでしょう。こちらもあなた方のことを笑えるような日もあるでしょうからね、そうでなかったらまったく不公平そのものですからね。

M. あなたさまのいいようにどうぞお考えになって下さい。私は人の言われることを信用するのを旨といたしておりますもので…さて、あなたは a に h を付けて書かれたり、また書かれなかったりされていますがこの理由をお話し下さいませんか。

V. それは動詞の場合と前置詞の場合との 区別をつけるためで、動詞のときには a に h を付け加えて書いて、«Quien ha buen vezino, ha buen maitino.»⁽³³⁾と、また «Quien asnos ha perdido, cencerros se le antojan.»⁽³⁴⁾とし、前置詞のときは h をつけずに書いて、«A buen

callar llaman Sancho.》⁽³⁶⁾ 《A carne de lobo, salsa de perro.》⁽³⁶⁾ 《A perro viejo no cuzcuz.》⁽³⁷⁾ などと言うことにしています。しかし、《Quien lengua ha a Roma va.》⁽³⁸⁾ という諺ではhを付け加えないでaだけとするか、それともhをつけて書くかで生じる差はみなさんにはずっとはつきりお分りいただけることでしょう。加えてこの帯気のhをつけてaを書くかそれともつけないかがどれ程大切なことを十分にわかってもらうには、《Quien no aventura no gana.》⁽³⁹⁾ という諺を見ていただくことで、ここでもしaventuraの最初のaが帯気の印を伴っていたらこの諺の意味のとれなくなる人もきっとでてくるのです。なぜなら、当然のことながら《Quien no tiene ventura no gana》⁽⁴⁰⁾ の意味だと思ってしまうからで、ここではどこにそのような意味のとり違いがあったのかをあなた方はもう十分お分かりでしょうね。

P. なるほど、とってもうまく説明なさいましたね。でも、一体いつ動詞になり、いつ前置詞になるのか見分けのつけられない者はどうしたらいいのでしょうか。

V. もしラテン語を知らないのなら、その人は少しは困るかもしれませんね。もっともちょっとした注意をすれば大したこともないのですよ。もしラテン語を知っている人なら、ラテン語そのものからも分かることなので何の苦労もないことでしょう。ただし、ラテン語を知っている人でも、物を書くときには実に雑な書き方をするので、hをつけて書くかそれともつけないかという点に何の区別をしない人もあるのですよ。ですから私は、これまでイスパニアにあったラテン語に対する無関心さがカスティーリャ語を正しく書くということを疎かにする風潮を生んだ一番大きな原因であったと今でもなお思っているのです。

M. きっとおっしゃる通りなのでしょうね。しかし私があなたのお手紙の中で気の付いたことですが、あなたは同じ単語にもその最初にaをつけておられるときとつけておられないときがあるのはどうしてですか。例えば、cevadado と acevadado; sentado と asentado, donde と adonde, llegado と allegado; ruga と arruga; vezado と avezado; basta と abasta などですが…

V. もしあなたが気を付けてみたら、それらの語に先立つ語が子音で終わっているのなら私はaをつけているし、母音で終わるときにはaをつけていないことを知ってもらえるでしょう。ですから、《Haz lo que tu amo te manda, y siéntate con él a la mesa.》⁽⁴¹⁾ という諺はこのように書いて、《… y asíentate…》とはしませんし、《El abad de donde canta, de allí yanta.》⁽⁴²⁾ として、《… de adonde…》とはしないのです。しかし、その前に母音がないのならいつもaをつけて、《¿Adónde irá el buey que no are?》⁽⁴³⁾ とか、《Allégate a los buenos y serás uno de ellos.》⁽⁴⁴⁾ とするのです。

M. 大そう厳密なきまりですね、それを正しく行なうには十分な注意がいりますね。

V. その通りです。だがそうだからといって他の人たちがしていることをあなた方に言っているのではなく、私の国のことばをひき立て、美しく飾りあげたいという一心で、私が日頃努めておこなっていることをお話ししているのですからこの点含んでおいて下さいよ。このような面倒なことをしたくないという人は放っておいていいのです、私の言うようにしないからといって地獄に落ちることもないでしょうから。

P. もっともお話しますが、あなたがおっしゃっていることを守らない人はカスティーリャ語を正しく書けないとお考えになりますか。

V. そのことについては、私は己のすべきことを十分に心得ていますよ。

M. 私の思っていることを言わせてもらえるのなら、あなた方イスパニア人の一部があるいくつかの個所に付けている a はどうも、私には響きがいいようには思えないのです。例えば, *atan bueno* というときや、イスパニア詩歌大全のなかの *O qué dichos atan vanos* というときのことなのですが。私はこれがあなたにはどんな風に聞こえるかは分かりませんが、しかしあなたがそれを使っておられるのは見たことがないのです。

V. そうですね、私が使わないことが十二分あなたへの返事になるはずですよ。その a は余分なもので、詩歌では韻の数をふくらませるために無学な吟遊詩人どもが付け加えたものだとご承知おき下さい。

M. なるほどね、納得がいきました。今度はなぜあなたは *truxo* と書かれるのかお話し下さい、*traxo* と書いている人もありますのでね。

V. その訳は、私の考えでは、*truxo* の方が発音が柔かいことと生れてこのかたそのように発音しているからですよ。

M. ラテン語の *traxit* から出たということはお考えにはなりませんか。

V. そのことは十分わかっていますが、私はカスティーリャ語を書くときにはラテン語でどう書いているかなんて気にとめて見たことはないのですね。

P. その点はバルデス様のおっしゃる通りですよ。というのは、私は《*Fue la negra al baño y truxo que contar un año.*》⁽⁴⁰⁾ といって、《*... traxo ...*》とはいっていませんものね。

M. 私はどうもあなたのおっしゃるこの *truxo* を認め難いですね。

V. なぜですか。

M. 私は多くの宮廷の役人、騎士、貴族たちが *traxo* と言い、そう書いているのを見、聞いているからですよ。

V. そんな人たちが彼らの *traxo* を書くのと同じ理由で私は自分の *truxo* を使っているのです。ですからあなた方は好きなのを選んで下さいね。

M. なるほどね、今後はそういたしましょう。さて、次は多くの人が a を書いているところをあなたはいつも e になさっていますが、その理由をお聞かせ下さい。

V. 例えばどんな単語ですか。

M. 次のようなもの、つまりあなたは *rancor* の代りに *rencor* を、*ranacuaje* の代りに *renacuaje*, *rabaño* に代えて *rebaño* とされていますが…

V. そのおたずねについてはただひとつ、次の理由しか挙げることが出来ませんね。つまりそういう方が私にはずっと響きがよく聞こえるし、また正しく文章を書いていると自信を持っている人たちもカスティーリャではそう書いているということなのです。

M. S で始まる語にあなたは e をつけたりつけなかったりされるのはなぜですか。うっかりしてそうされるのか、それとも何らかの規準に拠っておられるのですか。

V. 不注意だなんてとんでもありません。これは私が物を書くときに気を配ることにしている肝心なことのひとつなのです。つまり、カスティーリャ語をラテン語に一致させようとして形の似た語においてはラテン語がeを書かないときにはいつもこのeを外してしまうのだという人たちの考え方や、またいつもそのeをつけておくのだとする人たちのやり方を私はよしとして認めたがたいのです。私はカスティーリャ語の本当の姿を保つためにはこうするのがいいと思います。つまりもし問題の語に先立つ語がeで終わっていたらその次の語にはeをつけずに *casa de sgremitores* として、...*de esgremitores* とはしないこと、*el socorro de Scalona* として ...*de Escalona* とはしないということです。そして、もし前の語がeで終わっていなければ、次の語にはeをつけたらいいので、私はそのときには《*De los escarmentados se levantan los arteros.*》⁽⁴⁶⁾のように言うということです。

M. あなたのお話には私は納得いたしました。それだけでなく、その周到な配慮は讃えられてしかるべきですね。ですが、前の語がeで終わっていないのに、*esta, este, esto* の初めのeをつけたり落したりされるのはなぜですか。

V. つまりこういうことです。あなた方も知っているように、*esta, este, esto* は動詞で、ひとつの独立した意味を持つこともあれば、指示代名詞として他の異なった意味になる場合もあるということが理由なのです。ですから、読む人をまごつかせないようにしようとして、代名詞としてはeにアクセントがあるのでそのeを書き表わし、他方動詞では、もし皆さんがよく気をつけて見たら、アクセントが最後の母音に落ちるので、語頭のeは書き表わしてもほとんど発音されないで、このeは外してしまうのがいいと私には思えたということです。

C. それを私たちに例をいくつか挙げて説明して下さい。

V. いいですよ。もし私が、《*En salvo sta el que repica.*》⁽⁴⁷⁾とか《*Quien bien stá, no se mude.*》⁽⁴⁸⁾とか言わねばならぬときには、*está* とは書きませんが、《*Si tras éste que ando mato, tres me faltan para cuatro.*》⁽⁴⁹⁾、《*Si desta escapo y no muero, nunca más bodas al cielo.*》⁽⁵⁰⁾と言わねばならないときには私は *ste* と *sta* と書かないということですよ。

C. なるほどよく分かりました。

M. まことにあって、それは実に周到なお考えですね。こう申しますのも、私はこれまで物を読んでいてその *esta* が代名詞か動詞かを即座に見分けることができずまごついたことがこれまでも再々あったのですからね。なかでも、この形が二つ並んで出てくことも間々あり、一方が代名詞で他方が動詞になるのですが、これはあなた方を訳も分からず困らせてしまうことにもなるのですよ、例えば、《*Está esta tierra tan estragada.*》⁽⁵¹⁾のような場合のことです。

P. あなたの他にはそのように区別をして使っている人の書いたものを見たことはないのですが、それは私にはいいことと思えるし今後は言いようがありません。しかし、だからといって私にぜひそのことを守れと無理強いされるお気持はないのでしょうかね。

V. その点ではあなたのいいと思うようにすればいいですよ。あなたにいいことだと思ってもらえるだけでこちらは十分ですからね。

M. さて次には、いくつかの単語であなた方のうち多くの人たちが、他の人がeを使っている

のに i と書いているのを見ましたが…

V. その単語とやらを言って下さい。

M. vanedad というのか、あるいは vanidad なのか、以下同じで envernar か invernar, escrevir か escribir, aleviar か aliviar, desfamar か disfamar などです。

V. もしあなたがその点によく気を付けて見ていたとしたら、あなたの挙げた語のいずれにも私は常に i を用いて、e とはしていないのが分かってもらえるはずです。この理由は、私は i の方がいいと思うし、これまでずっとそう書いてきましたし、綴りにやかましい人たちも私と同じ書き方をしているのを見てもいるからです。e を使う人はおそらくは不注意でそうしているのでしょう。

M. 不注意だなんてありませんよ、というのはあのリブリーシャがその語彙集で e と書いているのですからね。

V. カスティーリャ語のことについてはあのアンダルシーア生れのリブリーシャの権威なんてものは二度と私に言い立ててほしくありません。私をいらいらさせることになるばかりですからね。

M. いいです、分かりました。ですが、誰かがその疑問に思うことをあなたに言うからといって腹を立てられるのもあなたらしくありませんね。つまるところ、あなたのおっしゃることに従うのですから。

V. いやいやそのことについては、あなたの言には何の正当性もありませんよ。あなたは、この私があなた方の面白くもない質問やなる程とも思えぬ質問をも我慢して聞き、返事をするようにとせつつ一方で、私の言い分のあるなしを考えもせず、私が腹を立てるのは我慢がならぬというのですからね。

P. まあまあお気持ちをお鎮め下さい。こうすれば如何でしょう。つまり、あなたさまには私どもの質問をご辛抱してお聞き願ひ、私どももあなたのご立腹はごもっともとしてつべこべ言わぬこととすれば…

V. そうなら言うことはありません。ここではっきりとさせておきますが、私にとっては見たり聞いたりすることで私の考えと合わないことに対し腹を立てられなかったり、不満をとらえられないことほど大きな苦痛はないのですからね。

M. あなたのご気性を私どもにはっきりとお見せ下さるのも結構なことです。さてそれはそうとして、私に質問をさせてもらえますね。ところで、taxbique と texbique, fraila と freila, trasquilar と tresquilar のどちらを採るのがいいのでしょうか。

V. あなたの挙げた単語とそれに関連する語では e を使うよりも a を使う方がいいと思いますし、もしこの点よく注意してもらっておれば、私がいつも a を使っているのが分かるでしょう。注意して物を書いている人たちも私と同じことで、これは間違いありませんね。

M. でもリブリーシャは…

V. もうリブリーシャは願い下げにして下さい、お願いだから。

M. おお、ご立腹ですね。でもまだまだ十回はそんな風にあなたさまをつついてお怒りにふれ

ることになりましょうね。

V. ほう、あなたは面白がっているんですね。だが、いつかはぎゅうと言わせて上げますから覚えておきなさい。

C. その“ぎゅっと”⁽⁶¹⁾とはどういうことなのか、分かりませんが…

V. 私が話に使う単語ひとつひとつの意味をあなたに説明しなければならぬ義理はありませんよ、ただ私の書いているものについて説明することですよ。

M. おことばごもっともです。さてと、私が質問を続けさせてもらいますと、*saldré* と書いている人もあるのになぜあなたは *salliré* とされるのですか。

V. *Sallir* から出た形だからですよ。

M. さて次のものであなたを迷路にひきずり込みましょうかな、これから逃れられるにはいろいろ言葉をついやされる必要がありますですよ。つまり、カスティール語には三種の *i*、即ち短い *i* と長い *i*、それにギリシャ語の *i* とがあって、もし私が間違っていなければ、あなた方はこれを区別せず使われていると思いますが、私はこれをカスティール語の大きな欠点だと考えています。もしそうでないのなら、この点何らかの説明をいただきたいのです⁽⁶²⁾。

V. その質問を“迷路”とあなたが呼んだのはけだし至言ですね。ですがよく聴いて下さいよ、その三種の *i* の夫々には他のどれを使っても正しくないそれ特有の位置があるのでその理由をこれからお話ししますからね。さてと、短い *i* が最も一般的ですから、まず最初に他の二つの *i* についてお話しをし、この二つについて知れることから推して、始めの短い *i* のことも言ったことと考えてもらいたいと思います。

P. それで結構ですね。

V. 長い *i* については、今日の最初のところで、*gi* でトスカナ人の耳に聞える音がカスティール語の人にはどのように響くかを話しておきました。ですから、長い *i* はあなた方のトスカナ語の *gi* と同じような発音にならねばならぬ場合はいつも使っていることになり、その *gi* と異った音になるようなときには使えないのです。即ち、*mejor, trabajo, jugar, jamás, naranja* の場合はいいし、その他この *ja, jo, ju* を持つ他の単語全部に使えるということです。

P. *je* を持つ語ではどうでしょう。

V. それは駄目です。

P. なぜですか、なぜ駄目なのですか。では、私たちが *gerra* と書いているのと同じようにして *gente* とせよとおっしゃるのですか。

V. いやそうは申しません、*guerra* は *u* を入れて書きますが、*gente* は *u* を入れませんからね。

P. では、*g* の次に *e* がきたら これはいつも *gente* の場合のように発音せよとおっしゃるのですか。

V. ええ、そういいたいのです。そう発音すべきなんですから。

P. なるほど、そういたしましょう。ですが、あなたは間々長い *i* に代えて *gi* と書いておられますがこれはなぜですか。

V. それは私がイタリア人に手紙を書くときのことで、私の書くことをよく分かってもらえるようにと思ってそのことばに書き方を合わせているからですよ。

M. よその国のことばにあなたの書き方を合わせようとして、あなたのお国のことばをその枠からはみ出させるのは私にはいいこととは思えませんね。

V. 私の国のことばを母国語とする人が私の書いたものが分からないほどにまで私のことばをその枠、基準からはみ出させてしまったのなら あなたの言も もっともだということになりますが、megior と書こうがまた mejor と書こうがもしこちらの言うことが分かってもらえるのなら、私の国のことばをその枠から逸脱させるというのは当らず、それどころか外国語で我々がことばをなお美しく飾り、加えてそれを母国語とする人のみならず、外国人にさえも分かってもらえるほどにまで我々がことばは広く行なわれていることをも示すことにもなっているのですよ。

M. ごもっともなお考えです。さて話しを進めましょう。長い i についてのお話をいただきたいのですから、今度はギリシャ語の i についてお話し下さい。

V. この点ではなお一層むづかしい問題がありますが、この y をどうしても使って、他の二つのものに代えてはならない場合が二つと、普段は使ってはいるがそれが不適当な場合がひとつあることをまず知って下さい。まず前者のひとつは y が子音のときと、もうひとつの場合は接続詞となるとときです。不適当な場合とはそれが語の終りになるときに使うのをいいます。その他ではどんな場合にもこの y を書くのはよくないと思って下さい。

M. それをいくつかの例で示していただければ、あなたのお約束を完全に果していただいたことになりましょうが…

V. 詳しく説明しましょう。この y が子音である限り 私は ギリシャ語の i を書き、mayor, reyes, leyes, ayuno, yunque, yerro のようにしています。このギリシャ語の i が綴りそのものの形を損なうように思えることが間々あって、respondyó, proveyó とかその他これと同じ場合に表われてきますが、私は形の悪さは気にせずに、正しい発音を表わす方がいいという考えを持っています。ただし、他の書き方をしたいという人と言い争いをする積りは毛頭ありませんからね。このギリシャ語の i を ay が動詞と間投詞のときには使いますが、副詞には使いません。というのは副詞なら aí と書くのが常だからです。したがって副詞では oy とし、動詞ではそうせずに oí と書くのです。また ya, yo と書きますが、これは子音になるためです。接続詞のときもまたギリシャ語の y を書いて、César y Pompeyo などのようにしています。いくつかの語の末尾では母音なのに y を書いて、assy, casy, ally のようにしていますが、これはよろしくないと思います。これまで挙げた場合以外では、私はひとつ残さず短かい i を使っているのです。

M. ラテン語、ギリシャ語からカスティーリャ語が取り入れたものでギリシャ語の i を持つ語では、あなたはこのギリシャ語の i を使われますか。

V. いいえ。

M. なぜですか。

V. ラテン語もギリシャ語も知らない人にそういうことばを知っている人と同じように書けと強制することはありませんからね。つまり我々カスティーリャ語を話す者はみなあるひとつの決

った書き方ができるのですから、即ち *misterio*, *silaba* (この語から *l* をひとつ落しましたが、これはラテン語を母国語としない人は *l* を二つ重ねて発音しないだろうと判断したためです) と書けるのですし、またギリシャ語の *y* は子音のとき以外には使いたくないし、また子音のときには短い *i* を書かないということなのです。もしこの区別が如何に大切かということを知りたいというのなら、ギリシャ語の *y* で書く *ley* は短い *i* の *leí* とはまったく異った意味になることを考えて下さい。Rey と rei のときにも同じことが分かるはずですよ。

M. この規則について君たち二人のお考えはどうですか、はっきり言いなさいよ。

P. それは私にはまったくもって正しいと思えますので、今までバルデスさんが話されたことのなかで一番優れたものだと考えるほどです。勿論、その他のものもなるほどと思えるものばかりですがね。私はといえばそんなに緻密に念を入れて問題を考えてもみななかったことを白状しなければなりません。

M. では今後はこういう規則を固く守ろうと思っているのですか。

P. ええ、私はその規則を覚えている限り、せめても何人かの人の手に渡るような物を書くときにはそれに従う積りです。またできることならこれまで私の書いてきたものの全部をその規則に準拠して訂正できたらなとも思うほどなのですからね。

M. これまでにあなたのお国の人で、あなたほど *dócile* (素直) な人に会ったことはありませんな。

P. その “*dócile*” というのはどんな意味ですか。

V. 己に与えられた教えを受け入れることができ、その考えを改められる人をイタリア人は “*dócile*” と呼んでいるのです。

(1975年 8月)

〔続く〕

註 記

- 1) Del lobo...: 「狼からは一本の毛でも、あのひたいの毛でも (抜けるものなら抜いてやれ)」の意味で、強欲な者からもらえるものは遠慮せずに、なんでももらっておくのがいいと教えた諺。
- 2) Dixo el asno...: 「ロバがラバに向って、 “ハイシ、ドゥドゥ耳の長い” と言った」の意味で、己の欠点を棚に上げて、他人のちょっとした欠点、誤ちを責めることの愚かさをいさめたもの。
- 3) Dixo la sartén...: Dijo la sartén al cazo: quítate allá, que me tiznas ともいい、内容とするものは2)と同じ。
- 4) De lo contado...: 「ほんの僅かなものをも狼は食ってしまう」とは、どのように注意を払って物をかくしても安全にかくしおすことは不可能だと教えたもの。
- 5) この一節は、Clásicos Castellanos 版ではテキストが不備で、内容に統一性が欠けているので、Clásicos Castalia (J. M. Lope Blanch 編) を参照し補足した。
- 6) Al ruin...: 「けちな奴には1パルもやっておけ、4パルもがかえってくるから」 Le dan la mano y se toma el brazo (手を渡して腕をとる) ともいい、強欲者にはまず初めに少しだけ渡しておいて、後で何倍も召し上げてやるのがいいと教えるものだろう。なお palmo は長さの単位で、約21センチ。

- 7) Cerilla あるいは cedilla と呼ばれた表記法 ç は、c が母音 a, o, u の直前に位置するとき、この c に歯擦音又は歯間音の音価を与えるためのものであった。具体的には çapato, coração, açúcar のような場合であるが、かつては他の二母音 e, i の直前でも用いられていた。Valdés はこの cedilla の使用を上記三母音との組み合わせの場合に限っている。また原則的には ç は無声音 [ts] → [θ] であり、z は有声音 [ds] → [ð] であったとするのが定説である。ñ について Valdés は、この字母が表わす音声はイタリア語 *signore, vigna* などの gn の音価に等しいと言いたかったのだろうか。
- 8) [f] > [h] はアラビア語の影響ではなく、唇歯音を持たなかったバスコ語系統の影響とするのが定説である。
- 9) Ramón Menéndez Pidal によれば、この s > x (esp. ant.) [ʃ] となる音声変化は語頭の場合 [例えば *sucu* (lat.) > *xugo* (esp. ant.) > *jugo* (esp. mod.)] に留まらず、アラビア語の影響が強い地域ではイスパニア語の s すべてに生じる可能性があったらしい。Manual de Gramática Hist. Esp., 37, 2], b) 参照。[k] (lat.) > [ds] (esp. ant.) は、広くロマンス語に生じた母音間子音の有声化のひとつと考えられよう。
- 10) *xáquima* (ár.) > *jáquima* (esp.) / *serica* (lat.) > *xerga* (esp. ant.) > *jerga* (esp. mod.)
- 11) アラビア語との接触によってイスパニア語は、それまでイスパニア語にはなかった多くの音声を如何に処理し、これを受容するかという問題に直面した。とくに両者間の音韻組織上の大きな差は歯擦音と咽頭音とにあったとされる。従って、イスパニア語は、ときには ç [ts], z [ds] によって、あるいはまた [h] によってアラビア語の音声を代替することとなった。(Rafael Lapesa, *Historia de la leng. esp.*, pág. 105)。このような断層を埋めるための試みは Valdés の時代にも引続き行なわれていて、未だアラビア語の語彙のイスパニア語化が進行中の段階にあったと予想される。特にこの部分、Montesinos 版では、*Esto digo por la superstición con que algunos de vosotros, hablando castellano, pronunciáis la x* (pág. 43) とあるが、他の版、例えば J. M. Lope Blanch 版では *...pronunciáis la s* (pág. 68) となっている。ここではイタリア語とイスパニア語との音声上の差をいうための言と解釈出来ようが、未だ黄金世紀に於いても、有声音の g, j, 無声音の x がそ調音点の近接という理由から、夫々有声音の s, 無声音の ss と混同されることが頻繁にあったことを思い起すべきであろうし、ここからも当時の歯擦音の音韻体系での複雑な分布がうかがえるように思える。
- 12) El abad...: 「僧院長はミサをあげて、そのあがりて食べるもの」とは、人はみな自分の稼ぎで生計を立てねばならないと教えたもの。
- 13) Al ruin...: 「いやな奴のことを話すと直ぐにそいつが現われる」とは、日本語にある「呼ぶよりそしれ」に当るのだろうか。
- 14) La muger...: 「女とめんどりとは出歩くと直ぐに道に迷う」とは、女が家に居ないで外に出歩くと思わぬ難儀や危険にあうことが多いぞと警告した諺。
- 15) El polvo...: 「羊のほこりは狼にはアルコールだ」とは、この世には自分で考えるほど他人に迷惑や煩わしさを及ぼさぬものもあるものだということをいったもの。
- 16) El mal...: 「とびの病とは、羽根が破れただけ、餌袋は丈夫そのもの」身体の不調を訴えながら大飯を食う者や憶病なくせに空いばりばかりする者を皮肉るときによく用いる表現。
- 17) 女性定冠詞は語源的には *illa* > *ela* であり、これが *ela casa* > *la casa*; *ela arca* > *el arca*, *ela espada* > *el espada* となったにすぎない。これが16世紀、17世紀までも存続したが、*el* と *la* との対立から *la* のみが女性形として固定した結果、女性定冠詞 *el* の使用はアクセントのある a, ha で始まる名詞の直前のみに限定されることになった。
- 18) *l'arca* などは後に Fernando de Herrera が採用してゐる。
- 19) Del monte...: 「山からはその山に火をつける者が出てくる」とは、我々は近しい者、親しい者からいろいろ被害や迷惑をこうむりやすいことを教えた諺。
- 20) →1)
- 21) Lo que da...: 「孫が祖父にあげるもの」とは、いい物をもらえると期待していてもつまらぬ物しか手

に入らないのが常だと教えたものか(？)

- 22) *Allegadora de ceniza*...:「灰をかき集めると同時に粉をばらまく者」とは、僅かなことにけちけちして、不必要なことに大金を使う者の浪費ぐせを皮肉ったもの。
- 23) *Dure lo que*...:「パンで作ったさじのように続く限り続け」とは、何時なくなるかも知れないものはこの今しっかりと掴んでおけと教えた諺。
- 24) *Quien hace*...:「一挺のかごを作る者は百挺をも作る」とは、あることをやってのける者は他に似たようなことをいろいろするものだということを意味する。普通はこの諺の次に *Si le dan mimbres y tiempo* (もしその人に蔓と時間とを与えたら) を付け加え、いい意味ではあまり用いないらしい。
- 25) *Quien sufrió*...:「耐えしのんだ者は沈黙し、望んでいたものを見た」耐えしのぶことの大切さを教えるものか(？)
- 26) *Quien con su mayor*...:「己の長上を馬鹿にする者は、まず最初は笑ったが、次には泣いた」年上の人には礼をつくせと教えたものか(？)
- 27) *excepción*=*excepción* は J. Corominas, *Dic. Crit. Etim.* によればすでに1348年に記録されている。しかしまだ通俗語の語彙ではなかったのかもしれない。Valdés は本書の他の部分でギリシア語、イタリア語などからイスパニア語が導入すべき語彙をも具体的に挙げている (págs. 136 y 137)。
- 28) *Al moço*...:「怠け者の召使はまず飯を食わせて、それから使いに出せ」とは、怠け者でも何か褒美ももらえとなると働く気になるものだから、褒美を餌にうまく人を使えと教えた諺。
- 29) *Ayúdate*...:「天は自ら助くる者を助く」
- 30) *Cría cuervo*...:「からすを育てよ、すればお前の目玉をくり抜いてくれようから」とは、恩知らずな者、訳の判らぬ奴にいくらしてやっても逆うらみされることが多々あるので用心せよと教えた諺。なお、*poneldo*, *envialde* などの形は Calderón の時代まで存続している。Valdés はこれらの形を容認してはいないが、Montesinos 版以外のテキストではこの容認されない形が見られる。命令形に加え未来形でも、*deziros he*, *tenerlo héis* などの形が16世紀まではかなり頻繁に使われている。加えて、16世紀までは弱形代名詞は文頭に立ちえなかったがため、Valdés の言う *ayudaráte* などの形が正則なものに見做されていた。
- 31) *Un correverás*...:「あるひとつのバネ仕掛けの人形とお前が見付けるもうひとつの人形」が直訳だが、ここでは *valdés* は相手の質問に答えて、“お前さんはもっともらしいことを言っているが、大したことを考えられるはずもないし、こちらもそんな期待はしていないぞ”と言いたかったのだろう。
- 32) Antonio de Nebrija の *Gramática Castellana* は1492年に初版が出たがそれ以降は、1770年迄再版もされなかった。Valdés はこの *Gramática* を読んだことがないと公言しているが、おそらく彼は Nebrija の真摯な態度に触れることなく、ただアングロシヤ生れだということで Nebrija を批判したのだろう。
- 33) *Quien ha*...:「善き隣人を持つ者は正しき勤行を持つ」とは、行ない正しき人を友とすべきであるという人生訓であろう。
- 34) *Quien asnos*...:「ろばを無くした者には首の鈴だけでもロバに見える」とは、ある物を欲しい、欲しいと思っている者にはほんの些細な部分だけで全部が手に入ったような錯覚に陥り易いので、この点十分気を付けるべきだと教えた諺。
- 35) *A buen callar*...:「正しき沈黙を人はサンチョと呼ぶ」とは、話しをする時には控え目にするのがいいことを教えたもの。
- 36) *A carne de lobo*...:「狼の肉には犬のソースを」物にはそれぞれ均合い、似合いが大切であることを教えたものか(？)
- 37) *A perro viejo*...:「老犬には“おいで、おいで”なんて呼ぶな」経験豊かな人、思慮深い人をだまそうとしても駄目だと教えた諺。
- 38) *Quien lengua*...:「舌のある者はローマに行く」たずねたずねてゆけば、随分遠い所にも行けるものだの意味。

- 39) *Quien no aventura...*: 「虎穴に入らずんば虎児を得ず」。
- 40) 諺ではなく、“幸運を持たぬ者は何も手に入れられない”との意味になり、39)とは相違してくる。
- 41) *Haz lo que...*: 「お前の主人が命ずることを為し、彼と共に食卓につけ」とは、主人のいいつけを忠実に守る者はその主人から絶大な信用を博すものだと言った諺。
- 42) →12)
- 43) *¿Adónde...?*: 「畑仕事をしない牛は何処に行くだろうか」とは、どのような仕事をしていても苦勞はつきもので、これを耐えしのばねばならぬと言った諺。
- 44) *Allégate...*: 「善き人たちに近づけ、そうすればお前も善き人の一人となるであろう」友を選ぶことの大切さをいった諺。
- 45) *Fue la negra...*: 「黒人女が風呂に行き、一年間の話を仕込んで来た」とは、初めてのもの、めずらしいものは愚者たちの喋話しの好材料になるとの意味。
- 46) *De los escarmentados...*: 「懲りた者のうちから上手な者が立ち上る」とは、いろいろ苦勞をして、その苦勞は将来二度と同じ轍をふまぬための計り知れぬ教訓となるものだと言った諺。
- 47) *En salvo...*: 「鐘を打つ者は安全だ」とは、自分に関係のないことなら、他人が困りはてている時にも、その人に向ってああしろ、こうしろと平気で口出し出来るものだとの意味内容。
- 48) *Quien bien está...*: 「居心地のいい者は動くな」あまりいろいろと山々を出すのはよくないと教えたもの。
- 49) *Si tras éste...*: 「もし私の前を歩くこの男を殺しても、4人にするにはまだ3人足りない」とは、あることを完全に仕上げるにはとても手間がかかるものだと言った諺。
- 50) *Si de ésta...*: 「もしこの結婚式から逃げおおせて、死ぬことがなかったら、もう二度と天国の結婚式には行かないぞ」とは、どうしてもならぬ難事に立ち至った者が、「もうこりごりだ、二度とこんなへまはしないぞ」と己に言い聞かすときに使う表現。
- 51) 諺ではなく、単に“この地は荒れ果てている”の意味。
- 52) *y* はラテン語がギリシア語イプシロンの音声を再現するためギリシア語のアルファベットから借用したものであるが、中世イスパニア語では *i* (ラテン語の *i*) と混同してしまうことも多々あった (*yr*, *yfante*, *ynfiernos*)。Lope de Vega も, *soi* と *soy*; *queréis* と *beys* のような表記を用いている。この二字母について Valdés の立てた区分をより厳密に定めたのが Real Academia Española で、19世紀初頭には、*y* は母音としては接続詞の *y* のみで、他には二重母音の半母音要素 (*hay*, *soy*, *ley*) としてしか用いられなくなった。